

髮差喜世留其外翫物之銀箸并高蒔繪之箸類高價之小間物手遊之類世上賣買不致分御用之節
 ハ、兒島伴助同虎之助江被仰付調進ニ相成猥ニ仕込置他所江賣出し候義は無之箸ニ付是迄御
 用達之手ニ付前書之品納方いたし候者并右品仕込置候者名前早々御取調來ル廿日迄持田勝
 助方江御申越可有之事

卯 正月十四日

北三廻り

〔華實年浪草一上〕太箸又謂之

〔町人囊〕或人の曰日本正月の儀式は神代の風俗をうつして清淨質朴を本としたる禮法なり、
略○中 雜煮の玄など、木具太箸の體質素をよしとす、

〔本朝二十不孝〕大節季に無い袖の雨

夫婦さこそは老の波かゝる憂事も是非なしせめて子どもが正月に太箸取らぬも情なし、

〔男色大鑑八〕執念は箱入の男

其後に水溜で深き鉢に櫻の花を浮て生貝を角切にして先細の箸を添て出せ略○下

〔我おもしろ上〕書もの、禮にとて割かけの箸をもらひて、

勘定の外とも思ひそろばんのたまものなれや割かけの箸

〔倭訓栞前編五〕をりはし。式野宮の條に兆竹折箸事と見え續日本後紀の長歌に折箸の本末玄

らにと見えたり、

〔倭訓栞前編二十四〕はしむかふ 万葉集に父母が成のまにく箸向弟の命と見えたり箸は

一對なるものゆゑにまかいへり今俗箸折屈の兄弟といふ是也古へ萩の折箸などいへば折

屈めて一對ともなせし也又童謡にはしをれすをれといふは箸折末折といふなるべしさ

れば古の時に箸竹幾株などいひしも今のごとく二條を一前などいふごとくにはあらず細